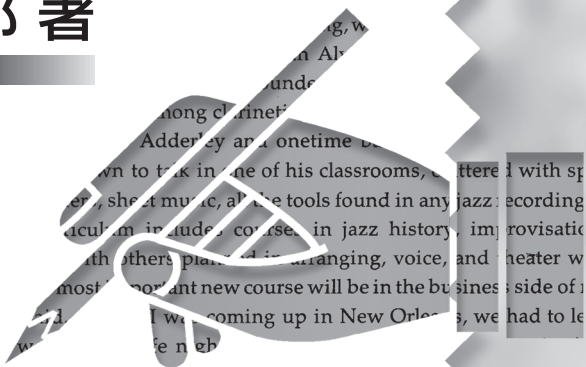


大学入試

150  
パターンで解く  
英作文

米山達郎 著



研究社



---

## はじめに

---

英作文で合格答案を書けるようになるためには、以下の3点を実行することが大切です。

- ① 文法的に正しい英文を書くことで減点を最小限に抑える
- ② 答案を見直したときにミスを発見して正しく修正できる
- ③ 自信を持って使いこなせる英文を大量に覚えている

### ① 文法的に正しい英文を書くことで減点を最小限に抑える

英作文で受験生が犯しやすいミスの根本原因を分類してみると、「日本語の発想での直訳」、「文法知識の不足」、「単語力の不足」、「純粋なケアレスミス」などに大別できます。本書では特に「**文法知識の不足**」を解消することに的を絞っています。なぜなら、文法知識は「有限個」なので学習しやすいですし、「客観的」に正誤を判定できますし、英語力全般の向上にも有効だからです。大学入試の英作文問題に限って言えば、「自然な英文を書く」ことよりも、「やや不自然でも文法的に正しい英語を書く」ことの方が大切です。**自分の書いた英語が文法的な観点から正しいかどうかを受験生がセルフチェック**できれば、減点を最小限度に抑えることができ、合格答案に一歩近づけることになるわけです。

### ② 答案を見直したときにミスを発見して正しく修正できる

英作文では自分の書いた答案を見直して、ミスを発見することが大切です。ただし、「ミスを見つけるぞ!」と決意してもそう簡単にできるわけではありません。それなりの訓練を積まないとミスはうまく発見できないのです。ですから、英作文のミスを能率的に発見するには答案の見直し方を練習する必要があります。本書が豊富な誤答例を掲載しているのには、まさに「**ミスの発見**」の練習を積んで欲しいからです。様々な誤答例をきちんと分析をすることで、ようやく「これは間違っている!」と断言できるようになります。**受験生が犯しやすい典型的なミスを読者の皆さんが「仮想的に」先取り体験**することで、本番の試験でそのようなミスを回避することができるのです。本書の誤答例を自分とは無関係だと考えないでください。我が身に置き換えて、「自分は絶対にこんなミスはしないぞ!」と自覚することが大切なのです。

### ③ 自信を持って使いこなせる英文を大量に覚えている

単語を覚えて文法を理解するだけでは英作文は上達しません。単語と文法に加えて「英文」を覚えることが大切です。英文という「一定の情報を含んだ文」を大量にインプットしていないと、自然な英文を書くことは不可能です。とはいえ、「とにかく丸暗記だ！」という学習法は意味がありません。大切なのは、**本番の試験で初めて出会う問題に対しても有効活用できるような汎用性の高い英文を確実に覚える**ことです。そのためには、まず英文のポイントを正確に理解することが不可欠です。本書ではこのような「**理解する → 覚える → 応用する**」という学習が効果的に行えるように、類書に比べてもはるかに詳しく丁寧に英文のポイントを解説しています。丸暗記してもすぐに忘れてますが、きちんと理解したことは忘れにくいものです。

以上の**3**点を確実に実行できるようになるまで、本書に粘り強く取り組んでください。そうすれば必ず英作文で合格答案が書けるようになることを保証します。頑張ってください！

本書のすべての英文のチェックは **Randall Pennington** 氏と **Stephen Farrell** 氏にお願いしました。細かい所まで丁寧にチェックしていただき、本当にありがとうございました。原稿の内容チェックは久保田智大氏にお願いしました。数々の的確な指摘に感謝します。最後になりますが、今回も編集担当の佐藤陽二さんには非常にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

米山 達郎

### Acknowledgements

I would like to thank Dr. Randall O. Pennington Jr. of the University of Delaware English Language Institute for his editing and advice in the preparation of this book. Special thanks too to Stephen Sylvester Farrell for proofreading all the sentences. I am very fortunate to have been able to work with both of you.

---

# 本書の構成と使い方

---

## Part 1 英作文の基本手順——解法を確認する—— p. 1

英作文問題を解く上で、受験生に知っていただきたい基本知識を確認・整理するパートです。英作文について受験生が抱いている様々な思い込みや誤解を解消することが狙いです。一気に読み通して、英作文の正しい作法の概要を頭の中に描けるようになりましょう。

## Part 2 暗唱英文 150 の解説——重要ポイントを理解する—— p. 29

ポイントを正確に理解した上で、確実に覚えて欲しい英文を紹介するパートです。すべて「短文」に統一していますが、本番の試験で活用できるポイントが満載ですから、じっくりと取り組んでください。最終的にはここで扱う 150 個の英文が、皆さんが覚えるべき『暗唱英文 150』になります。〈解説〉では「そのどこが重要なのか、なぜそうなるのか、どう覚えるべきなのか」というポイントや根拠や学習法も含めて説明しています。単純な丸暗記は無意味です。自分の頭でじっくりと考え、一般常識もフルに利用して、常に別の問題への応用まで意識しながら読み込んでください。

## Part 3 誤文訂正問題 150——暗唱英文を定着する—— p. 207

英作文でミスをなくすためには、答案を見直して自分でミスに気づいて正しく修正する訓練が必要です。150 個の誤文訂正問題を通して「ミス発見センサー」の感度を磨きましょう。誤文訂正問題の番号は、暗唱英文の番号と一致しているので、不正解の場合は該当する暗唱英文の解説に戻ってきちんと復習をしましょう。反復練習こそが英作文の点数アップを保証してくれるのです。

## 付録 暗唱英文 150——追加ポイント解説—— p. 223

150 個の暗唱英文を再録し、日本語を見てすぐに英語を思い出す練習が効果的にできるようにしています。この英文を使いこなせたら、まず本番の試験で困ることはありません。すべて完璧に覚えるまで何度でも繰り返し取り組んでください。研究社のホームページから音源をダウンロードして、「耳で聞く → 目で見て音読する → 手を使って紙に書いてみる → 暗唱例文と照らし合わせる → 間違った箇所を修正する」という作業を実践しましょう。

本書の構成通りに必ず「Part 1 → Part 2 → Part 3 → 付録」という順番で学習を進めてください。最大の学習効果が上がるように配慮して、パートの構成や問題の並び方まで工夫していますから、勝手に読み飛ばすことなく、必ずこの順番で取り組むことが肝心です。また、英作文の実力は日々緩やかに向上していくものなので、短期間に集中してたくさん問題をまとめて解くよりも、毎日少しずつ問題を解いて、少しずつ復習するという学習法を推奨します。もちろん鉛筆を握って紙に英文を書くという作業は必須です。

暗唱英文 150 を確実に記憶に定着させるためには、繰り返し英文に触れる反復練習が不可欠です。そこで読者の皆さんが携帯電話を使っていつでも手軽に暗唱英文 150 に触れることができるように、ツイッター上で専用のアカウントを作成しました。暗唱英文 150 を「日本語＋英文」の形式でランダムに毎日配信していきます。「大学入試 150 パターンで解く英作文」(@yone19651) をフォローして、反復練習に役立ててください。なお、今後はこのアカウントを通じて、大学入試の英作文に関する様々なお役立ち情報も逐次お届けする予定です。どうぞお楽しみに。

# Part 1

## 英作文の基本手順——解法を確認する——

英作文に取り組むときに、受験生にぜひ知っていてもらいたい基本的な知識を確認・整理するパートです。英作文について受験生が抱えている様々な思い込みや誤解を解消することが狙いです。一気に読み通して、**英作文の正しい解法の概要を頭の中に描ける**ようになりましょう。

具体的には、「英作文を書く手順」、「文型や文法の基本」、「品詞・句・節の確認」、「意識のコツ」などについて解説しています。「英作文問題をどこから手をつけていいかわからない」とか、「英文法の知識を英作文でどのように活用していいかわからない」とか、「直訳と意識をどのように使い分けられいいかわからない」という受験生は特にじっくりと読み込んでください。

さらに **Part 2** が終わってからもう一度 **Part 1** を読み返すことを勧めます。最初に読んだときとは異なる新たな「気づき」がきっとあるはずです。**Part 3** が終わってから再度 **Part 1** を読めば完璧です。

英作文の問題を解くときに「どこから手を付ければいいのかだろうか?」と迷うかもしれないが、日本語を英語に訳す際の基本的な手順はいつも変わらない。どんな英作文の問題でも原則として以下の手順 **1~4** を守って検討していけばよい。本番の試験でも日頃の学習と同じ**手順を守って英作文の答案を作成**することが、合格点を確保するための有効な戦略といえる。

### ★英作文解法の基本手順

- 1 【手順 1】 主語 (S) を決定する
- 2 【手順 2】 述語動詞 (V) を設定する
- 3 【手順 3】 修飾表現を処理する
- 4 【手順 4】 英文を連結する

(注) 上記の手順は「SV が 1 組含まれる短文」という情報単位で実行する。いくつかの文が連なった長い日本語を英訳する場合は、【手順 1】を行う前段階として「**長い問題文を SV が 1 組含まれる短文の情報単位に分割する**」という手順が発生することになる。

## 1 【手順 1】主語 (S) を決定する

英語には原則として主語 (S) が必要である。よって英作文を書く場合は、まず最初に「**主語を何にすべきか?**」を考えることが大切。もちろん、日本語の主語にあたる語句をそのまま英語でも主語として使えることも多い。

(例) 父が私にこのパソコンを買ってくれました。

☞日本語の主語にあたる「父が」をそのまま英語でも主語にして、**My father bought me this personal computer.** とする。

ところが、日本語の主語にあたる語句をそのまま英語で主語に使えない場合もあるので要注意。

(例) 昨日東京は雨だった。

☞「東京は」を主語にして (×) **Tokyo was rain yesterday.** とはできない。

「東京は」は場所を表す副詞として表現すべき。「昨日東京では雨が降った」ということなので、**It rained in Tokyo yesterday.** とするのが自然。

このように、日本語の「…が」や「…は」で示された語句が常に英語でも主語として使えるとは限らない。だから、その日本語の使われている具体的な文脈や状況をよく見極めた上で、一般常識もフル活用して適切な主語を決定することが、英作文では必要になってくるわけだ。

さらに、日本語では一人称の「私 (たち)」や、二人称の「あなた (たち)」が省略されやすいので、省略された **I / We / You** を補って英語に訳出しなければならない場合も多い。

(例) (朝食を食べたかどうか親から聞かれて…) もう朝食は食べたよ。

☞「私は朝食を食べた」ということなので、主語を補って **I have already had breakfast.** となる。

(例) (朝食を食べない娘に向かって…) 朝食は食べるべきだ。

☞「お前は朝食を食べるべきだ」ということなので、主語を補って **You should have breakfast.** となる。

あるいは、日本語でいくつかの文を並べるときも、同じ主語は何度も書かないので、やはり**省略された主語を補って訳す**必要がある。

(例) 息子と 2 人でサッカー観戦に出かけた。球場に着いたのは試合開始の直前だった。

→1 文目と 2 文目の主語はどちらも「息子と私は = 私たちは」なので、2 文目は代名詞の **We** を主語にするのが適切。全体は **My son and I went to see a soccer game. We got to the stadium just before the game started.** となる。



以上のように、日本語の主語をそのまま英語で使えない場合や、日本語に主語が明示されていない場合には、問題文の文脈や状況に応じて適切な主語を決定する必要があります。具体的には以下のパターンで考えよう。

- (a) 一般主語を使う
- (b) 無生物主語を使う
- (c) 名詞句を主語にする
- (d) 名詞節を主語にする  
(注) 句・節がわかっていない人は先に p. 16 を読むこと。
- (e) 形式主語の *It* を使う
- (f) 前文内容を受ける代名詞を使う

### (a) 一般主語を使う

英語の一般主語の *you* は「特定のあなた」という意味ではなく、「一般的に人は誰でも (= **people in general**)」という意味になる。

(例) 現地に行く方が外国語はうまく習得できる。

You can learn a foreign language better if you visit the country where it is spoken.

☞この日本語は特定の人だけにあてはまる内容ではなく、「一般的に人は誰でも現地に行く方が外国語はうまく習得できるものである」という一般論を述べているので、一般主語の *you* を用いるのが適切。

このように**個別の主語が設定できない**文脈や状況では、一般主語の *you* で書ける場合が非常に多い。英語の一般主語にはいくつかのバリエーションがあるが、以下の3点だけ押さえておけば十分。

- ① 一般主語は *you* を使うのが原則。英語では筆者から見た読者全般を二人称の *you* で捉えて、「あなた方は = 皆さんは = 一般的に人は誰でも」という発想で使うからである。
- ② *you* と *we* は交換可能な場合もあるが、一般主語の *we* を使うときは、*we* と**対立する別の集団を想定**している場合が多い。*we* には「(~とは異なり) 私たちは…」というニュアンスがあり、自分たちとそれ以外の存在との違いを前提として使われる。

(例) 現代は競争社会だ。

We live in a competitive world.

☞「(過去とは異なり) 我々現代人は競争社会に暮らしている」という文脈では **we** を用いる方が自然。

(例) ヒトは動物と多くの点で異なっている。

**We are different from animals in many ways.**

☞「人類／人間／ヒト」は **human beings** や **humans** と表現できるが、自然や野生動物などと対比して「私たち人間は」という場合は **we** を使うことが多い。

③ 一般主語の **they / people** は **you** でも **we** でもない第三者を指す場合に使う。これは三人称複数数の **they / people** の原義とも合うのでわかりやすいだろう。

(注) 単数の第三者には **someone / somebody** を用いるのが原則。 **someone / somebody** は代名詞で受ける場合は、(1) **he**、(2) **she**、(3) **he or she**、(4) **they** の4通りがあるが、大学入試では (1) **he** や (4) **they** を用いるのが無難。

## (b) 無生物主語を使う

無生物主語構文とは「無生物」が主語、「人」が目的語という構造で、主語の「無生物」が目的語の「人」に何らかの行為や状態を引き起こすという意味を表す文のことである。

(例) 怪我のせいで彼は明日の試合に出られないかもしれない。

**His injury may prevent him from playing in tomorrow's game.**

☞「怪我が彼を妨げるかもしれない → 何から? → 明日の試合に出ることから」という発想で **S (無生物) prevent O (人) from doing** を用いている。

無生物主語で使える動詞はだいたい決まっており、**すべての動詞が無生物主語構文で使えるわけではない**。よって、無生物主語の乱用は慎み、自信がある場合にのみ使うことが大切。まずは人を主語にして書けないかどうかを検討してみて、次に人を主語にしたら書けない、あるいは無生物主語の方が書きやすい場合限り無生物主語構文を使うくらいを目安にして考えよう。詳しくは **Part 2** で扱う。例文を「人主語」で書くと **He may not be able to play in tomorrow's game because of his injury.** となる。

## (c) 名詞句を主語にする

(注) 句・節がわかっていない人は先に p. 16 を読むこと。

主語に使える品詞は名詞や代名詞だが、名詞句も主語として使える。

(例) 毎日運動することは体にいい。

**Exercising every day is good for your health.**

☞「毎日運動すること」は動名詞句を使って **exercising every day** と表現できる。名詞句は原則として三人称単数扱いなので、述語動詞は **is** にする。

(注) 不定詞 **to do** も名詞句になるが、**To exercise every day** を主語にして、**To exercise every day is good for your health.** とするのは自然ではない。形式主語の **It** を用いて **It is good for your health to exercise every day.** とするのが自然。このように不定詞句を主語として使うのは避けた方がよい。よって、英作文の主語として使える名詞句は実質的には動名詞句だけだと考えて構わない。もちろん、「もしあなたが毎日運動したら、あなたは健康になる」と言い換えても文意は大きく変わらないので、一般主語の **you** を用いて **If you exercise every day, you will be healthy.** と書くこともできる。

#### (d) 名詞節を主語にする

(注) 句・節がわかっていない人は先に p. 16 を読むこと。

疑問詞節、**what** 節、**that** 節、**whether** 節などの名詞節も主語として使える。

(例) 君のやったことは道徳的に間違っていた。

**What you did was morally wrong.**

☞「君のやったこと」は **what** 節を使って **what you did** と表現できる。名詞節は原則として三人称単数扱いなので、述語動詞は **was** にする。

(注) 「彼らが賛成するということは確かだ」はどうなるだろうか？ 主語の「彼らが賛成するということ」は、接続詞 **that** を使って **that they will agree** という名詞節で表現できるので、全体は **That they will agree is certain.** となる。ただし、これも形式主語の **It** を用いた **It is certain that they will agree.** の方が自然。このように **that** 節を主語として使うのは避けた方がよい。もちろん、「彼らはきっと賛成するにちがいない」と言い換えて、**They will certainly agree.** や **They are sure [certain] to agree.** と人主語を用いて書くこともできる。

#### (e) 形式主語の **It** を使う

「…するのは〈形容詞〉である」という日本語は、形式主語の **It** を使って書けることが多く、真主語には不定詞句、**that** 節、疑問詞節、**whether** 節などを使う。

(例) 夜中に一人でこの辺りを歩くのは危険だ。

**It is dangerous to walk around here on your own at night.**

☞〈**It is**+形容詞+**to do**〉を用いる。「それは危険だ → 何が? → 夜中に一人でこの辺りを歩くこと」という発想。

(注) 〈**It is**+形容詞+**that SV**〉を用いた(×) **It is dangerous that you walk around here on your own at night.** は非文。形式主語の **It** に対して、真主語に不定詞句と **that** 節のどちらを使うかは、形容詞によって決まる。

## (f) 前文内容を受ける代名詞を使う

英語では前文内容を受ける指示代名詞には **this / that / it** を使うことができる。ただし、**it** は既出の語句を受ける用法の方がずっと一般的で、前文内容を受ける場合でも **if** 節や **when** 節の内容を受けることが多い。英作文で**前文内容を受け**る場合は **this** や **that** を使うのが一般的だと考えて構わない。また、この **this / that / it** も (b) で解説した「無生物主語」に準じて使えば表現の幅が広がるので非常に便利である。

(例) 僕はいつも一人だ。そのせいで孤独を感じる。

**I am always alone. This makes me feel lonely.**

☞「その」は「僕はいつも一人だ」という前文内容を指すので、**This** を主語にすればよい。もちろん、「それが理由で孤独だ」と言い換え、**Because of this [For this reason], I feel lonely.** と人主語を用いてもよい。

### 〈応用・発展〉

**前文内容を this や that で受けて、さらにその前文内容を it で受ける**という書き方は英語では頻出する。〈文1 → 文2 (this) → 文3 (it)〉という構成で、**this** と **it** は共に〈文1〉の内容を受ける。

(例) 彼から騙されたせいで、私は悲しかったし、大変困った事態まで生じた。

**He deceived me. This made me sad. Moreover, it caused a lot of trouble.**

☞**This** も **it** も共に1文目の内容 (**He deceived me**) を受ける。3文目を **this caused a lot of trouble** とすると、この **this** は2文目の内容 (**This made me sad**) を受けることになり、「私が悲しかったことが多くの困った状況を引き起こした」という意味になってしまう。

(例) 僕は宿題をたった3日で仕上げた。母親に話したら、「これは奇跡だ!」と言われた。

**I finished my homework in just three days. I told my mother about that. She told me that it was a miracle.**

☞**that** も **it** も共に1文目の内容 (**I finished my homework in just three days**) を受ける。3文目を **this was a miracle** とすると、この **this** は2文目の内容 (**I told my mother about that**) を受けることになり、「母親に話したことが奇跡だ」という意味になってしまう。

このように、英作文を行う場合には日本語の主語にあたる語句をそのまま英語でも主語に使う必要はないし、そのまま使えない場合も多い。「**どんな主語を使えば一番書きやすくなるか?**」ということを常に念頭に置いて英作文に取り組みやすい。同じ日本語でも主語によって全く異なった英語で書けるのだから、**なるべくミスが避けられそうな主語を選んで英語に訳出するのが最も安全な戦略**と言える。ある主語を決定して書き始めて何か問題が生じた場合は、その主語を見直すことが大切である。ほんのちょっと発想を変えて日本語を言い換えるだけで、はるかに書きやすくなることもある。杓子定規に考えず、もっと柔軟な発想で英作文にアプローチして欲しい。

## 2 【手順2】 述語動詞 (V) を設定する

日本語の述語動詞は省略されることはなく、文末付近に書かれているので発見するのは難しくない。以下の3点に留意して適切な述語動詞 (V) を設定しよう。

- (1) 主語とのつながりを考慮して使うべき動詞を定める
- (2) その動詞が使えるフレーズ (= 語法・文型) を確認する
- (3) 文脈・状況・常識を活用して、その動詞の形を微調整する (時制や助動詞など)

(注) 【手順2】の述語動詞 (V) を設定する際に、「この動詞を用いるとすれば主語は XXX になるな!」とか、「この動詞なら無生物主語の方が自然だ!」などの気づきがあって初めて【手順1】の主語 (S) が決まる場合もある。

(例) 私は昨日彼女に謝罪した。

(1) 「謝罪した」が述語動詞 → (2) apologize to A 「A (人) に謝罪する」というフレーズを確認 (文型は SV) → (3) 「昨日」のことなので過去形にする → I apologized to her yesterday.

(例) 彼が君にお金を貸してくれるかもしれない。

(1) 「貸してくれる」が述語動詞 → (2) lend A B 「A (人) に B (物・お金) を貸す」というフレーズを確認 (文型は SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub>) → (3) 「かもしれない」に相当する助動詞が必要 → He may lend you some money.

(例) 彼女が人を待たせたことはない。

(1) 「待たせる」が述語動詞 → (2) keep A waiting 「A (人) を待たせる」というフレーズを確認 (文型は SVOC) → (3) 「(今まで) …したことがない(経験)」は現在完了形にする → She has never kept anyone waiting.

このように「動詞の語法 (=動詞の使い方の決まり)」を正確に覚えていないと動詞の設定はできないことになる。ここでは文型 (=単語の並べ方の決まり) の基本知識と今後の動詞に関する学習法を確認しておこう。文型を理解するコツは**日本語の語順との違いをイメージで実感すること**であり、動詞の覚え方のコツは**なるべく具体的な「フレーズ」で覚えること**だ。それぞれの文型で用いる主な動詞のリストや、特に英作文でポイントとなる動詞の語法は **Part 2** で詳しく扱うことにする。

### 動詞の語法から見た文型の考え方

#### ① 第 1 文型 (SV)

(例 1) 赤ちゃんが笑った。My baby laughed.

英文には必ず主語 (S) と述語動詞 (V) があるので、英作文では「誰が/何が」にあたる主語 (S) と「どうする/どうした」にあたる述語動詞 (V) を確定することになる。(例 1) の主語は「赤ちゃんが」=My baby、述語動詞は「笑った」=laughed なので、My baby laughed. となる。これは日本語と英語の語順が全く同じなので間違えることはまずない。

(例 2) 私は大阪に数日間滞在します。

I will stay in Osaka for a couple of days.

「S は V する」という日本語は、主語 (S) と動詞 (V) だけで成り立つ第 1 文型 (SV) の語順で表現する。日本語と英語の語順が同じなので、S の部分に名詞や代名詞を代入して、V の部分に動詞を代入すれば OK。

ただし、第 1 文型は S と V だけになることは少なく、〈前置詞+名詞〉を後ろに伴う場合が多いということ覚えておこう。(例 2) は「私」が主語、「滞在する」が述語動詞なので、I (S)+will stay (V) という語順になり、その後につけて「大阪に」は in Osaka、「数日間」は for a couple of days と〈前置詞+名詞〉で表現している。

〈第 1 文型で用いる動詞の覚え方〉

laugh=「笑う」とか、wait=「待つ」という覚え方をしないように。laugh at his jokes 「彼のジョークに笑う」とか、wait for a train 「電車を待つ」のように前置詞つきのフレーズで覚えるのがポイント。このようなフレーズで覚えておくと、動詞の後に前置詞句が続くことで、その動詞が自動詞だと自動的にわかるという利点がある。動詞と前置詞の相性まで一緒に覚えられるのも利点。

## ② 第2文型 (SVC)

(例3) 彼女は悲しそうに見えた。She looked sad.

「誰は何々である／どうである」という文を書きたいときは第2文型を用いる。(例3)の「彼女は悲しそうに見えた」と書きたいときの主語は「彼女は」、述語動詞は「見えた」。そうすると She looked... となるが、「何々」に当たる「悲しそうに」が足りない。そこで「...」のところに sad を補う必要がある。このように説明を補う語のことを「補語」と呼ぶ。

(例4) 私は40歳の日本人男性です。I am a forty-year-old Japanese male.

「SはCである」という日本語は、主語(S)と動詞(V)と補語(C)から成り立つ第2文型(SVC)の語順で表現する。主語(S)の説明を補語(C)で補っているので、結果的に第2文型は〈S=C〉という関係を表すことになる。(例4)は「私(S)=40歳の日本人男性(C)」という関係なので、第2文型を用いて I (S)+am (V)+a forty-year-old Japanese male (C). となる。

補語(C)には形容詞や名詞などを使う。(例3)の補語は形容詞の sad で、(例4)の補語は名詞の male。さらに、第2文型では〈S=C〉の関係を表す動詞なら be 動詞以外でも使える。(例3)の「彼女は悲しそうに見えた」も「彼女(S)=悲しかった(C)+そう見えた(V)」という関係にあることを確認しておこう。

〈第2文型で用いる動詞の覚え方〉

become=「なる」とか、look=「見える」という覚え方をしないように。become a writer 「作家になる」とか、look sad 「悲しそうに見える／悲しげな顔をしている／悲しい表情を浮かべる」のように補語つきのフレーズで覚えるのがポイント。

## ③ 第3文型 (SVO)

(例5) 母はクッキーを焼いた。My mother baked some cookies.

「誰が何をどうする／どうした」という文を書きたいときは第3文型を用いる。例文の主語は「母は」、述語動詞は「焼いた」なので My mother baked。今度は「何を」にあたる「クッキーを」が足りない。そこで、some cookies を足して、My mother baked some cookies. で完成。このように「何を」の部分は動詞の動作の目的・対象にあたるので「目的語」と呼ぶ。

(例6) 彼に電話をしてその件について話し合った。

I called him and we discussed the matter.

「SはOを／にVする」という日本語は、主語(S)と動詞(V)と目的語(O)

から成り立つ第3文型(SVO)で表現する。日本語の語順通りに〈S+O+V〉とは言えない。日本語を「Sは+Vする+Oを/に」という語順に変換して考えるのがコツ。目的語(O)には名詞や代名詞を使う。

(例6)の前半は「私は(S)+電話した(V)+彼に(O)」と語順を変換してI(S)+called(V)+him(O)となる。後半は「私たちは(S)+話し合った(V)+その件を(O)」と語順を変換してwe(S)+discussed(V)+the matter(O)となる。

〈第3文型で用いる動詞の覚え方〉

(例5)のbakeのように自然に目的語が浮かぶ動詞は大丈夫だが、(例6)は(×) I called to him や(×) we discussed about the matter というミスを犯しやすい。これは日本語の「…に」や「…について」に引きずられて前置詞のtoやaboutを付けた間違いである。よって、call=「電話する」とか、discuss=「話し合う」という覚え方はしないように。第3文型で用いる動詞はcall someone「誰かに電話する」とか、discuss something「何かについて話し合う」のように目的語つきのフレーズで覚えるのがポイント。このようなフレーズで覚えておくと、動詞の後に目的語が続くことで、その動詞が他動詞だと自動的にわかるという利点がある。さらに、第3文型は日本人が苦手な前置詞を用いる必要がないので、「可能な限りミスを防ぐ」という戦略からも英作文でお勧めといえる。迷ったらなるべく人主語の第3文型で書くようにしよう。

#### ④ 第4文型(SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub>)

(例7) 彼が私にこのCDをくれた。He gave me this CD.

「誰が+誰に+何を+どうする/どうした」という文を書きたいときは第4文型を用いる。この語順は第3文型に「誰に」という目的語を足した形だと考えればよい。(例7)の主語はHe、動詞はgave、「何を」にあたるのはthis CDだが、そこに「私に」という目的語を加えることになる。その場合は、動詞のすぐ後ろに置いて、John gave me this CD. とする。語順は常に「誰に(O<sub>1</sub>)」→「何を(O<sub>2</sub>)」となる。

(例8) 私は彼に年賀状を送った。I sent him a New Year's card.

「SはO<sub>1</sub>にO<sub>2</sub>をVする」という日本語は、主語(S)と動詞(V)と2つの目的語(O<sub>1</sub>/O<sub>2</sub>)から成り立つ第4文型(SVO<sub>1</sub>O<sub>2</sub>)の語順で表現する。日本語を「Sは+Vする+O<sub>1</sub>に+O<sub>2</sub>を」という語順に変換して考えるのがコツ。通例O<sub>1</sub>には「人」、O<sub>2</sub>には「もの」が入る。

(例8)は「私は(S)+送った(V)+彼に(O<sub>1</sub>)+年賀状を(O<sub>2</sub>)」と語順を変換



して I (S) + sent (V) + him (O<sub>1</sub>) + a New Year's card (O<sub>2</sub>) となる。ここでは (×) I sent a New Year's card him というミスに注意。

〈第4文型で用いる動詞の覚え方〉

give = 「与える」とか、send = 「送る」という覚え方をしないように。give someone something 「ある人にある物を与える」とか、send people New Year's cards 「人々に年賀状を送る」のように**2つの目的語つきのフレーズで覚えるのがポイント**。

### ⑤ 第5文型 (SVOC)

(例9) 君は奥さんを幸せにした。You made your wife happy.

「誰が+誰を(何を)+どう+する」という文を書きたいときは第5文型を用いる。(例9)の主語はYou、動詞の「した」はmade。「奥さんを」は目的語のyour wifeなので、You made your wife. これだけだと「君は奥さんを…にした」となり、文が不完全なままである。そこで「…」に「どう」に当たるhappyを補えばYou made your wife happy.となる。このhappyも説明を補う語なので「補語」と呼ぶ。

(例10) 君を秘書にしよう。I will make you my secretary.

「SはOをCにVする」という日本語は、主語(S)と動詞(V)と目的語(O)と補語(C)から成り立つ第5文型(SVOC)の語順で表現する。日本語を「Sは+Vする+Oを+Cに」という語順に変換して考えるのがコツで、第5文型は「SはO=CにVする」という関係を表す。補語(C)は目的語(O)の説明を補っている。(例10)の「私は君を秘書にする」は「私は(S)+する(V)+君(O)=秘書(C)」という関係。第5文型を用いてI(S)+will make(V)+you(O)+my secretary(C).となる。

〈第5文型で用いる動詞の覚え方〉

make = 「する」とか、leave = 「放置する」という覚え方をしないように。make someone happy 「誰かを幸せにする」とか、leave her alone 「彼女を一人の状態に放置する／彼女を一人にしておく／彼女に干渉しない」のように**目的語と補語つきのフレーズで覚えるのがポイント**。補語には形容詞、名詞だけでなく、不定詞、現在分詞、過去分詞、動詞の原形など様々な表現が用いられるので、具体的な動詞の語法として個別に覚えていくのが効果的である(詳細はPart2で扱う)。